

# 子どものスポーツ場面におけるヒヤリ、ハット ゼロ運動

—より安全な指導を目指して—

與名本稔\*

抄録

小学校から大学まで体育の授業やクラブ活動における事故が後を絶たない。その原因として、子ども（児童、生徒、学生、スポーツを行う選手等）や指導者（教員、コーチ等）の緊張感の薄れや授業、課外活動、練習に対する慣れなどによって、学校や安全な環境下でスポーツを行わせている場合にも事故を起こすケースがあるのではないかと考えた。

本研究では、子どもや指導者がどのような環境においても事故を起こしてはならないという自覚が必要であり、スポーツに関わる子どもや指導者、環境面、実施方法などについて、研究を行うことを目的とした。

調査実施対象者：①子ども（12歳～18歳）、②指導者（子どもを指導している教員やコーチ）

ヒヤリとした経験やハットした体験をもとにアンケート調査とインタビュー調査を実施した。スポーツ経験のある子どもからは、「ヒヤリハットを防ぐ対策として、「声かけ」、「大きい声で知らせる」、「危ないところに近づかない」といったキーワードが挙げられた。指導者からは、「ルール作り」、「お互いのコミュニケーション」、「情報の共有」、「緊張感」、「安全対策のための道具（遊具）管理」といったキーワードが挙げられた。子どもと指導者のヒヤリハットを未然に防ぐための対策について、KJ法を用いて自由記述をまとめた結果、2つの知見を得ることができた。

- 1、スポーツを行う場所では、「道具の管理」、「グラウンドの整備」、「天候」、「時間帯」に気をつける必要がある。
- 2、スポーツを行う子どもは、「声かけ」、「コミュニケーション」、「緊張感」、「ルール」、「規則」に気をつける必要がある。

キーワード：子ども、指導者、声かけ、ルール作り、コミュニケーション

---

\* 東海大学体育学部競技スポーツ学科 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

# Reduction of Frightening Moments in Children's Sports Activities

## —Towards Safer Sports Instruction—

Minoru Yonamoto \*

### Abstract

There is no end of accidents during physical education classes or sports club activities at elementary schools, junior high schools, high schools, and universities. This research looks into the possible causes which are decreasing attentiveness and habituation to classes, extra-curricular activities, or training among children (pupils, students, and sports players) as well as instructors (teachers, coaches, etc), and which can lead to accidents under a safe environment for sports at schools. Children's and instructors' awareness of preventing accidents in any environment is indispensable, so this paper aims to investigate the environmental and practical factors concerning children and instructors when doing sports. The targets of the research are: 1. Children (12 to 18 years old); 2. Instructors (teachers and coaches for children). Questionnaires and interviews were conducted about actual experiences of frightening moments. The children with sports experiences gave such keywords for prevention as: "call out to each other"; "let the others know in a loud voice"; and "keep away from the dangerous areas." Meanwhile the instructors' keywords include: "rule-formation"; "mutual communication"; "sharing information"; "attentiveness"; and "facility (play equipment) management for safety measure." Regarding the preventive measures against frightening moments, the results analyzed by KJ methods show the following two points: 1. In a place to conduct sports, it is necessary to take into consideration "facility management," "field maintenance," "climate," and "time of the day"; 2. Children who play sports need to pay attention to "calling out," "communication," "attentiveness," "rules," and "regulations."

Key Words : Children, Instructor, Calling out, Rule-formation, Communication

---

\* Tokai University 〒259-1292 Kitakaname Hiratsuka-city, Kanagawa JAPAN

## 1. はじめに

小学校から大学まで体育の授業やクラブ活動における事故は、後を絶たない。その原因として、子ども(児童、生徒、学生、選手など)や指導者(教員、コーチなど)の緊張感の薄れや授業、練習に対する慣れなどが考えられる。

以下、児童、生徒、学生、選手を子どもと表記、教員やコーチを指導者と表記する。

指導者や学校が安全な環境下でスポーツを行わせていない状態で事故を起こすケースもある。また、子どもや指導者がどのような環境においても事故を起こしてはならないという自覚を持たなければならないことはもちろんのこと、それ以外に環境面や実施方法について、継続的に対策を取ることが重要であるのではないかと考えた。

高等学校学習指導要領保健体育における内容は、A～H までの領域がある。中でも、危険なスポーツ科目として、C 陸上競技、D 水泳、F 武道などで、死亡事故や大けがを負った事故が取り上げられている。C 陸上競技では、砲丸を相手の顔に投げたことで事故を起こしたケースがある。D 水泳では、溺れて死亡したケースがある。F 武道の柔道では、27 年間で 100 名を超える子どもが亡くなっている。これらの原因として本人の体調や技能における可能性も考えられるが、屋外で行われるサッカーやハンドボール、陸上競技(砲丸投やハンマー投)などは、本人の体調や技能ではなく、明らかに本人の不注意や指導者の指導不足が原因であると考えられるケースがある。被害にあった子どもも苦しいが、加害者となってしまふ子どももそして指導者も非常に苦しむことが考えられる。

## 2. 目的

現状の施設や道具等の環境の中でできる授業の方法やクラブ活動において、事故を未然に防ぐためにどのような対策をしているか、アンケート調査とインタビュー調査によって、子どもと指導者がいままでヒヤリとしたことやハットした経験を調査し、だれもが安心してスポーツを行える環境を整えることが目的である。

## 3. 方法

### 1. 調査対象者

- 1) 子ども 246 名(12 歳から 18 歳までのスポーツを実際に経験している子ども)
- 2) 指導者 20 名(12 歳から 18 歳までの子どもを指導している教員、コーチ(30 歳～68 歳))

### 2. 調査方法

子どもについては、アンケート調査を実施して、過去に体験したスポーツを基に調査を進めた。

指導者については、これまでのスポーツ指導の経験を基にインタビュー調査を実施した。

### 1) 子どもへのアンケート調査内容

- (1) いままでスポーツをしてきて危険な場面(ヒヤリとしたりハットしたこと)に遭遇したことに関する質問を 2 項目。
- (2) 危険な場面(ヒヤリとしたりハットしたこと)にあったときの状況や行動に関する質問を 3 項目。
- (3) 危険な場面(ヒヤリとしたりハットしたこと)にあったときの心理状態に関する質問を 2 項目。

### 2) 指導者へのインタビュー調査内容

- (1) いままで指導の現場でヒヤリとした経験やハットした経験などに関する質問を 3 項目。
- (2) けがや事故を起こしてしまった選手の状況に関する質問を 2 項目。
- (3) 仮に事故が起きた場合の処置に関するガイドラインについて質問を 2 項目。
- (4) 子どもたちが安全にスポーツを行うために実施している共通認識に関する質問を 2 項目。

## 3. 調査期間

2012 年 4 月 5 日～2013 年 1 月 31 日までを調査期間とした。

## 4. 結果及び考察

調査結果は、自由記述によって得られた回答を KJ 法(KJ: Kawakita Jiro method)を用いて分析した。

### 1. 子どもの場合

調査の結果、子どもの行っているスポーツの経験としては、「サッカー(38 名)」、「陸上競技(36 名)」、「バレーボール(30 名)」、「野球(24 名)」、「バスケットボール(24 名)」、「バドミントン(16 名)」、「ソフトボール(10 名)」、「テニス(8 名)」などが多くその他の種目として、「水泳」、「剣道」、「ソフトテニス」、「アーチェリー」、「卓球」、「ソフトボール」、「スノーボード」、「スキー」、「ヨット」などが挙げられた。

アンケート調査からスポーツをしていて危険な場面(ヒヤリとした経験やハットした経験)に遭遇した経験のある子どもがほとんどである(97.6%)ことがわかる。(図 1)。

しかし、自由記述の中では、自分自身が危険と感じるのではなく周りの子どもや友達が危険な状態であると感じていると回答する子どももいることから、必ずしも自分自身だけではなく周りを見て危険を感じていることもあることがわかった。

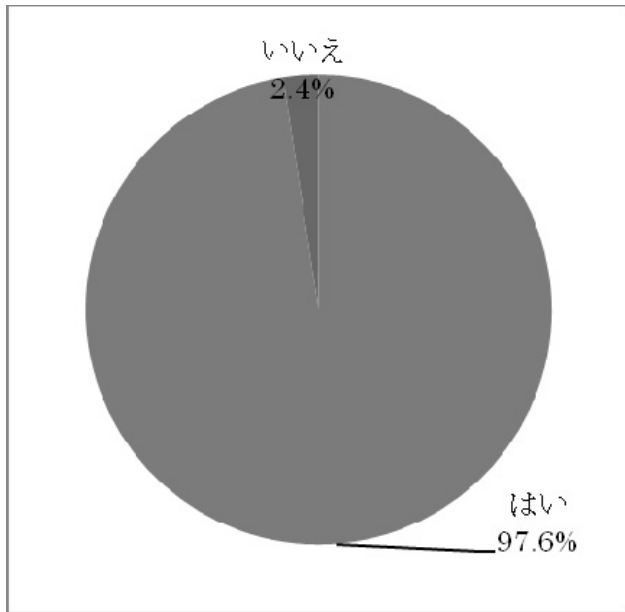


図1

危険な場面(ヒヤリとしたことやハットしたこと)に遭遇したことがありますか。(n=246)

### 1) 危険を感じた時の原因と対策

危険な場面(ヒヤリとした経験やハットした経験)の状況に関する自由記述では、「狭いエリア」、「他競技と接触」、「暗かったとき」など「環境面」に関する回答が24.3% (63名)で最も多かった。次いで「試合中」、「集中していた時」、「気づかなかった」、「ふざけていた」など「自分自身」に関する回答が23.3% (56名)であった。この2つの回答から危険な場面に遭遇した時の状況として「環境」や「自分自身」に原因があることが予測される。

次にこれらヒヤリとした経験やハットした経験を未然に防ぐための対策としては、「お互いに声をかけ合う」、「大きい声で危険を知らせる」、「コミュニケーション」といった「声・言葉」に関する回答が49.1% (118名)と最も多かった。また、「グラウンド整備」、「道具の場所」、「モップをよくかける」といった「環境面」に関する回答が25.0% (60名)であった。さらに、子ども自身がケガや危険な場面に遭遇したために「周りをよく見る」、「危ないところに近づかない」、「一定の距離」といった「自分自身」に関する具体策を上げている回答が21.6% (52名)であった。

(図2参照)

子どもがスポーツをする上で危険を感じた時間帯に関しては、16時～18時が38.3%と最も多く、18時～20時(15.8%)、14時～16時(13.3%)であった。16時～18時は、多くの子どもたちがクラブ活動を行っている時間帯であり、また、日が沈み周りの状況がわかりづらくなる時間帯であることが考えられる。

### 2) 子どものタイプ

危険な場面を避けるためにどのような心がけをしてい

ますかという問いに対して、自由記述によって得られた回答を基にKJ法を用いて分析した結果、3つの子どものタイプに分けることができた。

#### (1) タイプ A

キャプテンやチームリーダー経験があり、仲間を引っ張っていくようなタイプ。ヒヤリハットを防ぐ対策として、「声かけ」、「コミュニケーション」、「状況判断」、「整備」、「グラウンド環境」など自分自身だけではなく、全体を把握したうえで回答をしている子ども。

#### (2) タイプ B

自分自身では、危険な体験はあまりしていないが、周りに危険な経験をした仲間を見て、注意深くなったタイプ。ヒヤリハットを防ぐ対策として、「声かけ」、「大声で知らせる」、「周りを見る」、「掃除」、「プレーに集中する」など自分自身が気を付けることと周りの状況にも気を付けた回答をしている子ども。

#### (3) タイプ C

過去に自分自身の不注意による危険な体験から注意深くなったタイプ。ヒヤリハットを防ぐ対策として、「声かけ」、「大声を出す」、「ぼんやりしない」、「別のことを考えない」、「周りをよく見て行動する」、「ふざけない」など自分自身が気をつけなくてはいけないことについて回答をしている子ども。

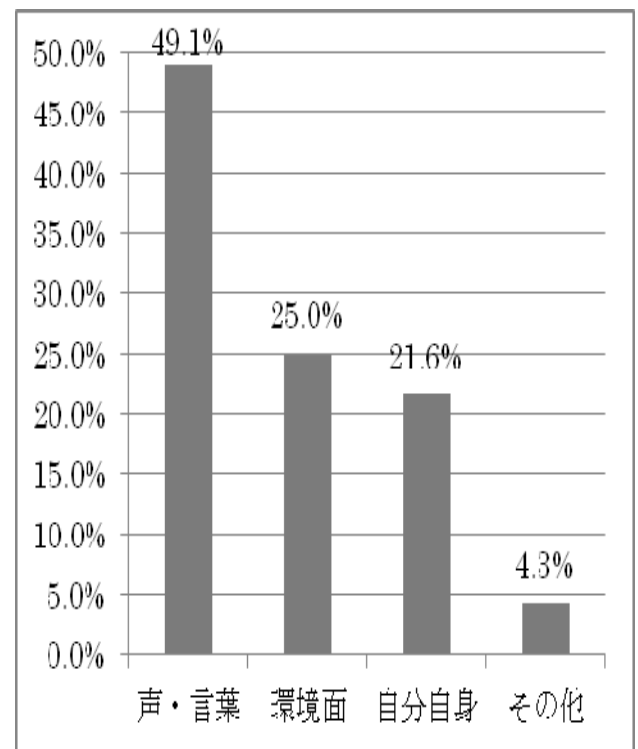


図2

危険な場面(ヒヤリとしたことやハットしたこと)を防ぐ対策。(n=246)



図3

看板を使用して注意を促す方法

## 2. 指導者の場合

調査結果から危険な場面(ヒヤッとした経験やハットした経験)に遭遇した指導者が100%であることが分かった。この結果から、子どものスポーツ指導に関わる指導者は、何らかの形で危険な場面に遭遇した経験をしているということである。

危険な場面(ヒヤッとした経験やハットした経験)を防ぐための対策としては、「声出しの安全確認」、「お互いの声かけ」「コミュニケーション」といった「声・言葉」に関するキーワードが挙げられた。また、「一定距離」、「状況判断」、「緊張感」、「時間帯」といった「環境面や決まり」に関するキーワードも挙げられた。また、「慣れ」、「決まり」、「ルール作り」、「不注意」など子ども全体を監督する立場から考えられるキーワードも挙げられていた。

これらの結果から危険因子を少しでも減らすためにお互いに安全を確認することや慣れに気を付けることが重要であることがわかる。しかし、いくら危険を回避するために環境を整えたとしても何らかのミスによって事故は起きてしまうため万が一事故が起きた場合の対策を子ども達と一緒に指導者が常日頃考えておくことが重要である。

## 3. 子どもと指導者における対策の共通点

スポーツを実際に行っている子どもと指導者では、ヒヤリハットを防ぐための対策として、大きく分けて3つの共通項目があった。

### 1) 声や言葉

「声かけ」、「コミュニケーション」、「大声で知らせる」、「お互いに声をかけ合う」、「声出しの安全確認」など声や言葉に関する対策をしている。

### 2) 環境面

「グラウンド整備」、「モップ掛け」、「道具の管理」、「ルール作り」、「時間帯」、「天候」、「グラウンドの使用状況」など環境面に関する対策をしている。

### 3) 自分自身

「慣れ」、「不注意」、「周りをよく見る」、「一定距離」、「状況判断」、「緊張感」、「危ないところに近づかない」など自分自身に関する対策をしている。

(図4~6参照)



図4

身近な道具を使用して対策を行う



図5

高いハードルを使用して進入を防ぐ



図6

コーンを並べて注意喚起する

## 5. まとめ

子どもと指導者がヒヤリハットを未然に防ぐための対策として、以下2つの項目にまとめられる。

### 1) スポーツを行う場所

「道具の整備」、「片付け」、「グラウンドの使用状況」、「天候」、「時間帯」などに気を付ける必要がある。

### 2) スポーツ行う子ども

「コミュニケーション」、「声かけ」、「状況判断」、「距離感覚」、「整備」、「緊張感」、「道具の管理」、「ルール」、「きまり」、「規則」、などに気を付ける必要がある。

スポーツに危険は、つきものであるが、現状の環境下で危険な場面(ヒヤリハット)を限りなくゼロに近づけるには、子どもや指導者がお互いに声かけをすることや環境面を確認し必要があれば整備すること、自分自身が気を付けることがあらためて重要である。

今後は、ヒヤリハットを防ぐための対策として指導者が実際に行っている対策などを現場ごとに調査し子ども達がこれからもより安全にスポーツを楽しめる環境づくりができるように貢献していきたい。

## 参考文献

- 1.伊東堯「体育・スポーツ事故判例の研究」  
道和書院 1983
- 2.船橋明男「これで防げるスポーツ障害」  
黎明書房 1991
- 3.野間口英敏「体育・スポーツ事故1980～89年地域編」  
東海大学出版会 1991
- 4.野間口英敏「体育・スポーツ事故1980～89年学校編」  
東海大学出版会 1991
- 5.スポーツ安全管理の要点・事件事例・判例  
斎藤勝 千葉正士 野間口英敏 編著 港北出版 1993
- 6.伊東堯 入澤 充「スポーツ事故ハンドブック」

道和書院 2000

7.東京都教育委員会「部活動中の重大事故防止のためのガイドライン」東京都高等学校体育連盟 2008

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

 笹川スポーツ財団  
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION